



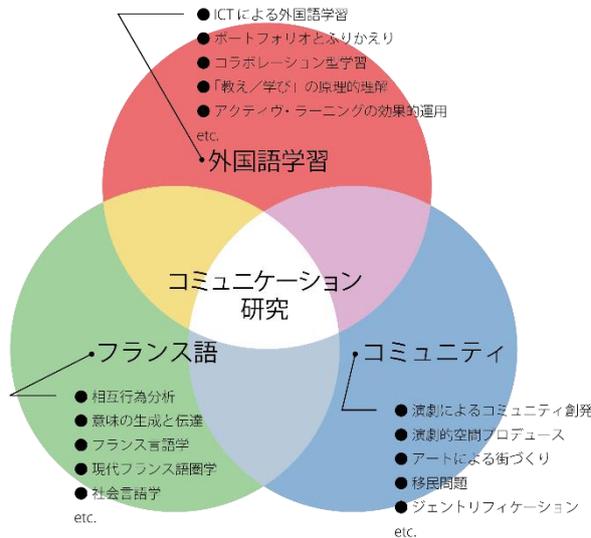
シーズ名

コミュニケーション、コラボレーション、コミュニティ創発

氏名・所属・役職

福島 祥行・大学院文学研究科・教授

Communication,
Collaboration,
Communauté



<概要>

わたしの研究は、おおきく分けると、①コミュニケーション研究、②外国語学習にかんする諸研究、③ひとびとの交流の場の生成、④現代フランス語圏研究、⑤言語学のいつつになります。

①・⑤はひとびとの交流場面(相互行為=コミュニケーション)を動画に撮り、そこにあらわれる音声、動作、視線などを、0.1秒単位で詳細に分析することにより、ひとびとのコミュニケーションの詳細をあきらかにするものです(マイクロ分析)。そのけっか、ひとびとは、ひとりひとりがかってに発話しているのではなく、全員のコラボレーションにより、ひとつの発話をみんなでつくりあげていることがわかりました。

②は、情報機器やネットワークをもちいた ITC (Information and Communication Technology 情報通信技術)による外国語教育のほか、ラーニング・ポートフォリオやグループ・ワークによるアクティヴ・ラーニングの研究を、やはり相互行為・コミュニケーションの観点から研究「学び」とはそもそもいかなるものなのかを研究しました。そのけっか、ひとびとは、社会的なコミュニケーションの場で学んでいることがわかりました。また、欧州評議会の言語学習規範である「複言語・複文化主義」の立場から、言語学習のありかたについて提言しています。

③は、「コミュニケーション研究」すなわち「ひとびとはどのようにして通じあえるのか」ということを解き明かす研究から派生したものです。具体的には、ひとびとがグループで活動するさいのさまざまな問題(協働、共感、共通理解、リーダーシップ、モチベーション)を、いかに解決するかについて研究しています。また、地域のひとびととともに演劇をつくりあげるなかで、あらたな人間関係=コミュニティがたちあがってくるさまを研究しています。このことは、アートやイベントによる街づくりにも応用されています。

④は、世界各地にちらばるフランス語圏の社会について、複言語・複文化主義、社会構築主義の立場から研究をおこなっています。とりわけ、さまざまなひとびとの交流(コミュニケーション)によって生じる移民問題やジェントリフィケーションに関心をもっています。

<アピールポイント><利用・用途・応用分野>

①・③コミュニケーションは個人ががんばっておこなうものではなく、コミュニケーションの相手や環境などとの相互行為(インタラクション)であるという視点から、より効果的な広報戦略や、コミュニティのたちあげと継続、人事の研修、司会・リーダー研修、コミュニケーション・ワークショップなどに応用ができます。

②言語学習について、学びの原理からとらえることで、これまでたんなるテクニックしか論じてこなかった外国語学習を、自律的・持続的なものとすることができます。また、ラーニング・ポートフォリオなど、他分野の学習にも応用可能なアイテムの開発が可能です。

④現代フランス語圏についての知見と、コミュニケーションに起因する社会問題への考察から、コミュニティや街づくりについての提言や監修がおこなえます。

<関連するURL>

<http://chat-noir.com/>

キーワード

コミュニケーション、相互行為分析、アクティヴ・ラーニング、協働(コラボレーション)、外国語学習、ICT、ポートフォリオ、コミュニティ、演劇、街づくり、つたえることとつたわること